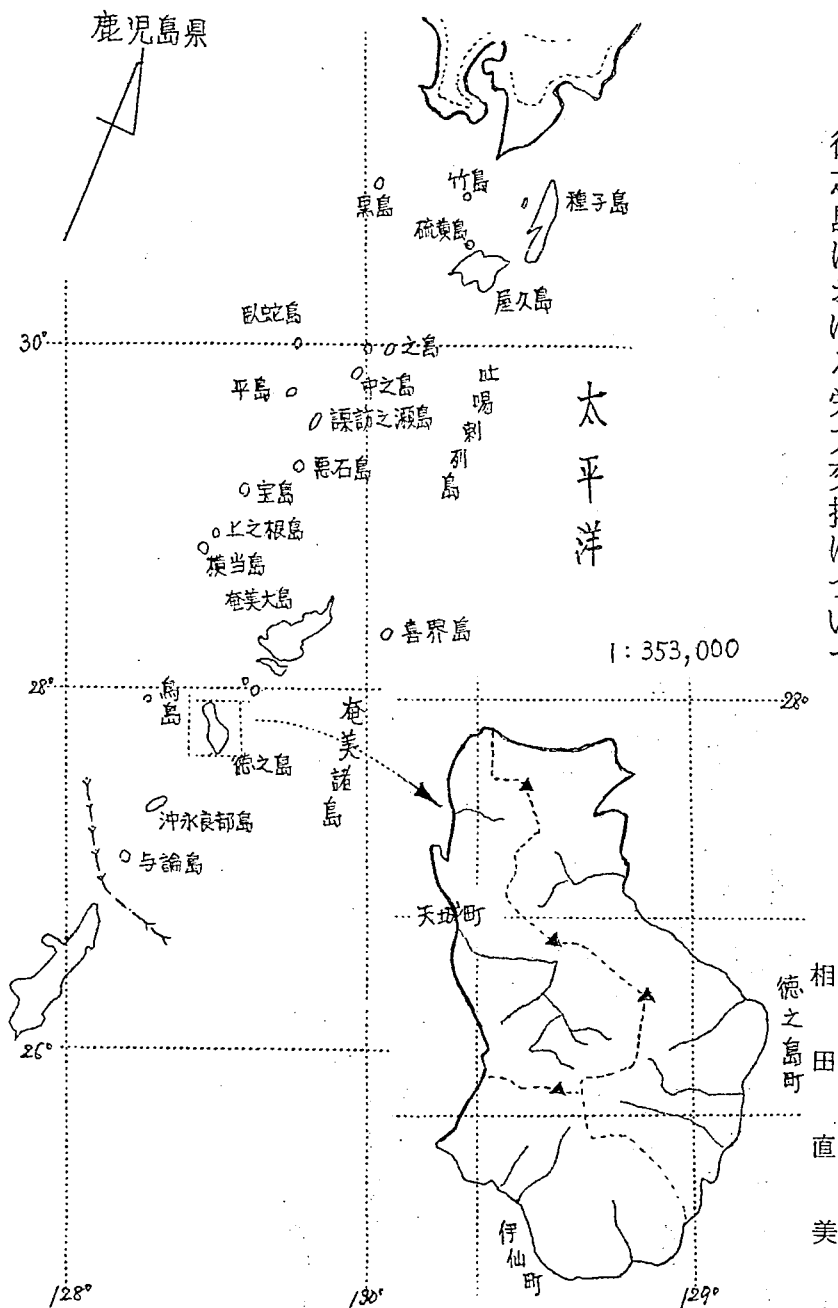


徳之島における労力交換について



徳之島の概略

この島は、太平洋戦争の結果アメリカ軍政下におかれたが再び、昭和二十八年十二月二十五日、祖国に復帰したのである。

現在この島は、徳之島町・伊仙町・天城町という三つの町に分れ、その町の中にいくつかの部落がある。

徳之島町だけでも二十八部落あり、人口は、昭和四十三年現在で一万八千九十八人であり、これは年々減少している。

累 年 別 人 口

年 度 別 区 分	大正 9 年	" 14 年	昭和 5 年	" 10 年	" 15 年	" 30 年	" 33 年	" 34 年	" 35 年	" 37 年	" 38 年	" 39 年	" 40 年	" 41 年	" 42 年	" 43 年
世 帯 数	4819	4355	4248	4242	4097	4945	4796	4800	4946	4893	4895	4906	4963	5005	4982	4928
人 口																
総 数	23001	19801	19419	18603	16879	21186	20015	19879	19804	19376	19360	19333	18820	18847	18595	18098
男	10923	9075	8926	8568	6883	10235	9541	9560	9573	9336	9313	9287	9081	9066	8933	8679
女	12078	10726	10493	10035	9996	10951	10374	10319	10231	10040	10047	10046	9839	9781	9662	9419
面 積	10035	10035	10035	10035	10035	10035	10035	10035	10035	10035	10035	10035	10037	10037	10037	10037
一平方キロメートル当り人口密度	229	197	194	185	168	211	199	198	197	193	193	193	189	188	185	180

この徳之島は、農業で生活を立てている人が多く、砂糖キビの生産高は、群島総生産高の四割強を占めている。他に、米、バナナ、自給程度の野菜等を作っており、工芸品としては、大島紬が有名である。

それらにたづさわる農家戸数は三千二百七十四戸、一万三千百九十九人であり、そのうち、専業農家が千七百

六十五戸、兼業農家が千五百九戸となっている。

その中から調査対象として選定した部落は十一部落（亀徳・徳和瀬・諸田・神之嶺・井之川・下久志・旭ヶ丘・母間・池間・反川・大当・花徳名）である。その中から更に平均的農家を選り出し調査に當った。

本調査は、昭和四十五年七月十三日から同二十九日までの十七日間、鹿児島県大島郡徳之島徳之島町を中心に行つたものである。

鈴木栄太郎氏は、著書「日本農村社会学原理」の中で「労力交換の慣習」について述べ、「結い」とは、もともと部落内の相互扶助と娯楽を目的としていたと、されているが、部落構造が変化している現在もその目的は変化していかないのだろうか？

主たる労力である所の「結い」が変化しないはずがない。

では、それが現在の農村において、どのような位置・意味をもっており、現在の農村社会にどのように取り入れられ、受け継がれていくのであろうか？この疑問から出発しようと思う。

現代社会は、都市周辺に人口が集まり、農村地区において、過疎現象が深刻な問題となっている。この徳之島もその例に洩れず、生産人口の島外流出に頭を痛めている。これが島の労働力に大きな変化を与えている一つの大きな原因である。

稲作作業のうちで最も多くの労働力が必要とするのは、誰もが知っている通り、田植の段階である。その場合における労働力の結集には三つの方法がある。即ちユイワク（結い）・奉仕・雇傭による結集がそれである。

砂糖キビ農業においては、最後の収穫時期（十二月～四月にかけて）つまり刈取・調整・脱葉の作業が最も多くの時間と労働力を必要としている。しかも、これらの作業は、すべて人力で行なわれているといつてよい。機

械が導入されていないわけではないが、機械化が行なわれにくい理由が六つある。

一、機械が高い。(借りる費用も高い。)

二、機械に使われる人数が多い。(機械の改良があまりなされない。)

三、機械と人力との差が余りない。(二、に基く。)

四、機械を使用すると生産価格が高つく。

五、怪我する割合が多い。

六、土地が狭い。(一軒の農家があちこちに土地を所有している。)

農業には、以上述べたように一時的に多くの労働力を必要とする時がある。それが次に述べるような方法を生み出したのであろう。

※ 奉仕という労働方法

分家の者が本家の田の稲を植え、小作人が地主の田の稲を、また氏子が神田を植えるなどは、食事以外に何等の報酬を受けることがないから奉仕田植と称してよいであろう。しかし、この奉仕という労働は戦前までであり、私が調査した結果においては全く奉仕という農業においての労働形態は見られなかった。しかし分家と本家、地主と小作人という関係がなくなったのではない。それは現在でも残存している。しかしそれは人々の意識の中で生きつづけているに過ぎない。現在では、分家、本家がお互いにユイワク(結い)を行っている。

しかし生活面では、先祖祭りとか十五夜という日には分家の者が本家に、小作人が地主に、供え物を持って来る(井之川部落)という事は今だにつづいている。

※ 雇用という労働方法

近年賃金を支払って農作業をさせる風潮が現われて来た。昔は一日の仕事のお礼としてお米を賃金の代りに渡したのであるが、現在はすべて賃金で支払われている。

昔は男子一日お米一升、女子一日お米男子の $\frac{2}{3}$ 升が相場であったが、昭和三十一年と二年頃の賃金は男子二〇〇円、女子一五〇円であった。また昭和三十九年と四十年までは男子が一、〇〇〇円、女子が八〇〇円位であり、現在は男子が一、四〇〇円と一、五〇〇円、女子が一、〇〇〇円と一、二〇〇円位となっている。この相場は都会のアルバイト料とだいたい同様に移り変っていると見てよいであろう。

被雇用者は、その日暮らしの人が現在多い。

砂糖キビ農業において、現在これだけの賃金を支払っていたのでは、農家の生活が成り立たない。従ってユイワク（結い）という労働方法が今なを頻繁に行なわれている理由がここにある。

※ 結いという労働方法（労力交換の慣習）

「結い」というのは周知の如く日本全土といってもよいほど広く行なわれている労働力交換の方法である。しかしこの方法は、都会化の程度の低い、いわゆる山間僻地の村に至る程明瞭に現われている。

この徳之島もその例に洩れず、「結いわく」という労働力交換の方法が行なわれている。

この徳之島には、労力を結集するための組織などの組織はなくて、血縁と否とに拘らず、必要な場合に「結いわく」を依頼すれば、誰でもが特別の事情がない限り受けてくれるのが常であった。「結いわく」を貸してやることは、やがて自分が田植等を行う時、その「結いわく」を返してもらうことが出来るからである。

また、「結いわく戻し」を行う時には、男は男同志、女は女同志、子供に対しては子供が、これに当るのが旧来の慣例であった。又、田植の結いに對しては、田植で返すのが本来の立て前であるけれども、余儀ない事情の場合に、他の作業で返すことも珍しくはない。この「結いわく」という労働力交換の根本精神が「相互扶助」を目的としていることはいうまでもない。この根本精神である所の「相互扶助」は昔も現在も変わらない。

しかし、ここ数年前までの「結いわく」という労働力の交換は、労働能率を高めることばかりではなく、「結いわく」の作業が娯樂的であることも、「結いわく」の存在理由と考えられていた。というのは、「結いわく」

を依頼した場合、十時・三時のおやつとお茶・昼食・夕食は、もちろんのこと、晩酌まで「結いわく」を依頼したものが御馳走するということが暗黙の約束であった。

しかし、ここ四、五年前からは、十時と三時のお茶だけ依頼者側が出し、昼食は弁当持参、晩酌はなし（特に親しい友人に依頼した場合は別である。）という形式に変化していった。昔と今の「結いわく」の違いがそこにある。「結いわく」を依頼した例の家では、その家の女性には、十時・三時のおやつ・お茶・昼食・夕食の仕たくをするために多くの時間を費さねばならない。また、その家の女性だけでは用意できない場合、他の家の女性に手伝ってもらわなければならない。それがまた「結いわく」となるのである。

人口過疎化が激しくなった現在、一人でも多くの人が農作業を行うようにした方が能率的であり、よいのではないだろうか？という問題が人々の間から提案され、それがだんだんと現在行なわれているような「結いわく」に変化していったのである。しかし、その目的である所の「相互扶助」というものは、過去においても現在においても変化していない。

※ 農作業以外の「結いわく」

この「結いわく」という制度は、田植えやその他農耕に關する作業だけに止まっているのではない。前述したように、お茶、食事の用意をするために人を頼むことも「結いわく」である。また、家の普請や屋根の葺き換え、冠婚葬祭等の、諸々の作業が「結いわく」で行なわれている。

現在、徳之島では家の普請は、専門家である大工が行っているが、二、三年前までは、「結いわく」が行なわれていた。しかし、屋根の葺き換えは現在でも「結いわく」で行っている。この場合、茅の束も「結いわく」を頼まれた方が幾束か用意しなければならない。この場合の「結いわく戻し」は、持ってきてもらっただけの茅の束と、葺き換えにかかった日数を返さねばならない。

また、冠婚葬祭の場合の「結いわく」は、たいてい婦人の手間と食器類等の貸し出しである。このように「結

わく"は相互扶助ばかりでなく、財物による相互援助という形をとるものもある。

鈴木栄太郎氏は、その著「日本農村社会学原理」の中で、財物による相互援助の制度は講であると思うと述べているが、私は財物によるものだけの"結いわく"は存在しないと思う。なぜなら財物による相互援助の前には、必ず相互扶助という"結いわく"が立ちはだかっていると思うのである。しかし、鈴木氏の「ユイにして講の性質を備えるものもあれば、講にしてユイの性質を備えるものもある。」というのは賛成である。

また"結いわく"が或る作業のためにその場限り結成される場合と、"結いわく"仲間が組織されていて、それが永続的に固定している場合とがある。徳之島の場合の"結いわく"は、部落全体を一つにしっかりとめている。"結いわく"は、部落という小さな社会が成立するための必要条件である。

※ 刈取班という"結いわく"の徹底

現在、この徳之島では、刈取班というグループを作って農作業を行っている。(これは砂糖キビ農業の最後の作業である時にのみ活動するグループである。)これは、同じ部落の人々が六十人位集り、一つのグループを結成するのである。そして今日から三日間はAさんの畑の砂糖キビを刈取るために六十人がAさんの畑へ行き、それが終了すると次はBさんの畑へと移動していくという方法である。これは、"結いわく"と同じ目的と方法であるが、すべての作業を円滑に行うために結成されたグループである。この"刈取班"は、"結いわく"を徹底させたものである。

※ 能率あがる労働方法

人口過疎化からくる人手不足に対処するには機械の力を借りるより他に方法がないと思う。しかし小さな土地があちこちに分散しては機械の使用をあきらめねばならない。そこで考え出されたのが、"あぜはずし運動"と"土地交換分合"である。

"あぜはずし運動"とは、いくつにも区切られている小さな土地を一つの大きな土地にし機械を使用して能率

をあげようとする方法である。(協同作業になる。)

“土地交換分合”とは、だいたい同じ条件の土地を交換し、できるだけ土地を一カ所ないしは二カ所にまとめて農作業が円滑に行なえるように、また、機械が使用できる位の土地の広さにするために行なわれる方法である。“あぜはずし運動”、“土地交換分合”この二つの方法が現存、徳之島で行なわれている能率をあげるための方法である。

いずれもこれは、人口過疎化に対処するために考え出されたものであるといえる。

※ “結いわく”に対する農民の意見

“結いわく”をあなたはどうか考えるか?という質問に対して七十歳以上の老人は、“結いわく”賛成を唱えている。これは昔の“結いわく”に賛成しているのである。しかし、現在働いている三十代以上の人は、現在の“結いわく”には賛成であるが、昔の“結いわく”には反対である。という意見が百%であった。そして「もし人を雇うことが出来るならば人を雇う。」という人が百%という結果が出た。“結いわく”は義務感を伴うから重荷である。」というのである。このようなことを考えあわせると、農村社会に都市化の波が押し寄せてきたと考えられるが、それは、七十歳以上という高齢の人々には受け入れられにくい、それ以外の人々には、比較的容易に受け入れられる、ということではないだろうか。

以上、述べたことから分るように、“結いわく”という労力交換の慣習は、今なお農村社会の人々の間で生きている。過去において農村社会を語るに“結いわく”をなくしては語れない。現在においても“結いわく”なくしては、やはり語れないのではないだろうか。しかし、時代がたつにつれて、それは直接表面にでなくなる時がくると思うが、人々の意識の中には生きつづけていくだろう。

しかし、その“結いわく”は、過去においても今日でも、明らかに労力の交換であり、給付に対して同じ価値の反対給付を要求しているのであるが、過去の“結いわく”というものと現在の“結いわく”というものは、ど

こか違っていると思うのである。それは、人々の意識の違いと時代の流れからくるものである。それは、衰退の過程を辿り、部落構造の主軸をなす絶対的な存在とは言いがたい。しかし、衰退の過程を辿っていても部落の中から消えることは考えられない。

古い慣習というものは、都市化の波に押され経済の発達にともなってしだいに壊れ去ってしまうものである。がしかし、都会ほど人々の出入りが激しくない農村社会においては、まだまだ永続性、土着性は根をはっている。農村社会特有の face to face の関係が強いのである。以上、述べたことから、私は、この徳之島に資本主義経済が更に浸透して、都市的生活に変ったとしても、「結いわく」は残ると思う。

何故なら、それは土地と結びついた社会関係の一つの形式であるからである。

以上